

『工場で働いた僕』

作：輪島貴史

ある工場の、ある部署にて働いていた僕は
ある日、解雇を告げられる
「君は何も生みだしていない、このまま仕事を取れないなら
3ヶ月後にクビだ」

と言われ
自分で仕事を取れるように、と告げられた

今まで、言われるままに、仕事をこなして
ただ時間だけを過ごしてきた僕には
仕事の取り方なんて分からなかった

この機械はどうなっているのか
この製品はどうなっているのか

深く考える事もなく、言われるままに、ボタンだけを押してきた僕には
自分一人で仕事が取れるはずもない

そんな僕に、解雇を告げた上司が「工場を見学して来い」と言った

他の部署は、同じ工場とは思えない程
違う機械で、違う仕事をしていた
それでも、見学の僕を迎え入れてくれた
僕は、何をしていたか分からなかったので
質問をする事にした

「これは何をやる機械ですか？」
「今は何をしていますのですか？」

相手は、嬉しそうに答えてくれたので、僕はさらに質問をした

「やってみてもいいですか？」
「ここはどうするのですか？」

相手は、嬉しそうに答えてくれた

とても簡単な作業なのに、とても難しい仕事だった

もし、面白いかと聞かれても
すぐに面白いとは言えない
なぜなら、それはとても簡単な作業だから
ずっとそれをしろと言われたら、きつとつまらないだろうし
それで仕事を取れと言われたら、きつと難しい作業なのだから

それでも、僕は、解雇という事実には落ち込んでいたのと
仕事を取れない現実を告げられ、自分に価値が無いと傷ついていたので
だれかに褒められたかった、認められたかったのだろう

教えてくれた人達、一人一人に
ありがとうございました
ありがとうございました
と、頭を下げて、掃除をした

最後に、「また来てもいいですか？」と尋ねると
「またおいで」と言ってくれた

次の日も、その部署を訪ねた、まだ分からない仕事だけど
面白いと言われたら、すぐには答えられないけど
今日もよろしく願います、と

一人一人に頭を下げて
昨日聞いた事と同じだけど、それでも、もっと上手くできるように
何度も何度も質問をして、その度に謝って、お礼も言った

帰る時は掃除をして帰った

ある日、その部署は、少しだけのんびりしていた
いつも忙しいわけではないらしい

僕は「何かお手伝いできる事はないですか？」と尋ねたら
「今日は特に無いから休んでていいよ」と言われたので

今まで、一部分の作業しかしてこなかったから
この部署でしている仕事を、最初から最後までしてみたいと
お願いをしたら、嬉しそうに教えてくれた
その日の終わりには、作業はなんとか一人でできるようになった

そうしている内に、解雇期限が迫り
上司に呼び出されたが、その言葉は意外なものだった

「ある部署から、君にお手伝いの依頼がきているので応援に行って欲しい」
「会社内とはいえ、人を貸すわけなので、人件費を請求できる」
「君が取ってきた仕事だ」と言われ、解雇は白紙になった

自分で仕事を取る、なんて、皆目見当もつかない事だったのに

分からない事を質問しただけなのに

挨拶をしただけなのに
お礼をしただけなのに
掃除をしただけなのに

一人でやってみたいとわがままを言っただけなのに
とてもじゃないけど上手くできているわけじゃないのに
申し訳なくて謝ってばかりだったのに

そんな僕に仕事をして欲しいと依頼がきたんだ

僕は仕事が楽しくなった、面白くなった
だから、もっと役に立ちたくて、もっと上手くなりたくて
もっと質問するようになった
相手はもっともっと教えてくれた
僕はもっともっと質問するようになって
もっともっともっとお礼を言うようになって
お礼の数に負けないくらいにたくさん謝るようになった

今までの僕が見たら、
同じ事、同じ質問を繰り返しているだけに見えるのかもしれない

でも、今は、面白い

その仕事が面白い

その仕事でたくさんの人にお礼を言える事が嬉しい

迷惑かけてごめんなさいと、謝れる事が嬉しい

今日も仕事ができると思ったら、楽しい

そんな、仕事の仕方を教わった
ある工場で働いた僕の話。

でも、この話にはまだ続きがあるんだ

一つの仕事ができるようになった僕は
その次の部署へも興味を持ち、見学に行き
同じように、分からない仕事を手伝うようになった
できるようになったら、また次の部署へと、繰り返している内に
工場の仕事全てができるようになり

いつしか僕は工場長になったんだ。